

# 中年翻訳家 ローカを走る!



東江一紀

ラージプリント版の原書が欲しいなあ、と思うきょうこのごろである。翻訳のテキストが、だんだん読みづらくなってきているんですよ。小さい活字のペーパーバックだったりすると、ほんとうに目が疲れてしまう。周りでも、同年配の同業者たちが、急にそういうことを言いだすようになった。

ある日気がつくくと、「鬱」という字が書けなくなっていた。いや、もともと書けなかったんだけど、以前は、辞書にぐっと目を近づけて、一画ずつ筆写していたのに、今では、あの程度以上目を近づけると、活字がぼやけてしまうんです。

しかたなく、パソコンのエディタの画面で、

フロントを最大の72ポイントにして、「鬱」と打ち込んだら、これはもう、実にはつきりと、一画一画が見えたんで、ま、とりあえず安心しました。パソコン導入の思わぬメリットだ。フロントによかった。

つまり、将来的には、電子テキストが普及して、あるいは、スキャナーの精度とスピードが向上して、原書にしる、日本語の本にしる、パソコンに取り込むことが容易になると思われる。で、それを自分に都合のいい字体やサイズで読めばいいというわけだ。

百インチぐらいの巨大モニターに、72ポイントの原書テキストを映し出し、例えば『小学館ランダムハウス英和大辞典第五版』の電子ブックを引き引き仕事をしている自分の姿を想像してみると、いささか不気味ながら、心温まるものがある。

今手もとにある仕事を消化するだけでも、たぶん五、六年はかかるだろうから、わたしにとって、これは絵空事ではない。もちろん、問題は視力の衰えより仕事の遅さにあるわけですが、はっはっは。

しかし、老化はいずれ訪れる、避けられない、近々来る、ほらもうそこまで来た、と、段階的に心の準備を整えてきたつもりでも、いざとなると、「突然に」とか「理不尽な」とかいう思いがつきまとう。

自分だけは歳を取らない、自分だけは死な  
ない、という子どものころの故なき全能感が、  
まだまだ根っこを残していたんでしょか。  
大人になりきれないまま、老人になっていく  
というわけだ。薄ら寒いような、いっそ気が  
楽なような……。

過剰な煩惱に悩まされつつ、過剰なエネル  
ギーに衝き動かされて、がしがし働く時期が  
そろそろ終わろうとしているのだとすれば、  
それは一種爽快なできごとかもしれないけど  
(そうかいな?)、何かを成し遂げたという実  
感もなく、ただしぼんでいくのは、あまりに  
もさびしいよなあ。

だから、これぐらいの歳になると、みんな  
いろいろ焦りだすんでしょね。深く枯れて  
しまおうなんて心境には、なかなかなるも  
んじゃありません。

つい最近まで、ひと足先に老眼の徴候が表  
われた妻に対して、patronizingな、つまり、  
いたわりつつ見下すような態度をとってきた  
ことを、わたしは今、海より深く反省してい  
ます。ただし、遠浅の海だけだ。

わが身に老化の波が押し寄せてきて、それ  
ではじめて、妻が同志に思えるとは、なんと  
も身勝手に情けない心性だが、結局、「他人は  
わたしの痛みを持つことができない」(ワイト  
ゲンシユタイン『哲学探究』)ということだし

ようかね。

いえ、ここでいきなり、ワイトゲンシユタ  
インが登場するのも、ちと理由がありまして。  
三週間ほど前にようやく訳了したミステリー  
が、たいへんな難物で、ワイトちゃんも古今  
の哲学者たちを殺していくという、たいへん  
凝った仕掛けの近未来サイコ・テクノ・メタ  
フィジカル・サスペンスだったんです。

いくつかの事情で、取りかかるのがだいぶ  
遅れてしまって、そのうえ、取りかかったら  
ぜんぜん進まないの。今思えば、その遅漏、  
じゃない、遅滞も、老化現象の一部だったの  
だが、二カ月で仕上げなくちゃいけないのに、  
半年もかかってしまい、しかも本人としては  
ずっとラストスパートをかけているつもりだ  
から、ようやく脱稿したところには、文字通り  
精も根も尽き果てていた。そして、近未来と  
いう舞台設定も、ずいぶんと現在に接近して  
しまっていた。

その半年のあいだに、白髪が百倍ぐらいに  
増えて、老眼の自覚症状が出てきて、四十肩・  
五十腰・二重顎・三段腹に悩まされて……抵  
抗する間もあらばこそ、一気に老いと向き合  
う仕儀となったわけだ。

春よ来い、とひたすら念じつつ、長い長い  
自宅軟禁生活を送り、青息吐息で刑期を務め  
終えたのが、折しも桜の真っ盛り。

わたしはすっかり、歩き始めたみいちゃん  
の気分で、花撩乱のおんもへ出てみたんです  
が、肉体のほうは、歩き忘れたじいちゃんに  
なってしまっていたのであった。

まあ、シヨックといやあ、シヨックです。  
従容として受け入れるような余裕はとてな  
いのだが、でも、自分の肉体に起こった変化  
というのは、ある面で楽しくもある。

うまく言えないけど、軽量級の脳みそでも  
なんとか制御できるような体になってきたと  
いう感じだろうか。欲するところに従っても、  
矩を越えるようなパワーがないというさわや  
かさ……。いえ、いえ、そういう渋い境地に  
収まり返るつもりは、毛頭ないので。

なんだか、四十代半ばで老化を語るのは、  
貧乏自慢に似て、ちと青臭く、ぎこちなく、  
どこかうれしげでもあるなあ。微笑をこらえ  
つつ、背伸び、じゃなくて、無理に背をかか  
めているみたい……。:

うくん、もうしばらくは中年に踏みとどま  
って、脂ぎった生きかたをしてみようという  
気になってきました。バージョン・ダウンは  
ゆるやかにやっついていかないとね。

とはいえ、老化の足は速い。

「ローカを走るな」と、先公にどなられてい  
たのは、ごく近過去の話だったように思える  
のだが……。